

20代におけるフェミニズムとの距離

○名古屋大学文学研究科 鬼頭孝佳

○東海学園大学 木村歩未

1 目的

この報告の目的はフェミニズムを専攻したことのない20代の大学・大学院生がフェミニズムに対し、どのようなイメージを有しているのかを質的に明らかにし、そのイメージを変容させるためにいかなる介入が可能であるかを一事例として探ることにある。

2 方法

そこでデータとして、そもそもフェミニズムにどのようなイメージを抱いているのか、自由記載を中心とする構造化された質問紙と半構造化されたインタビューを併用して最初に調査を行った。その後、上野千鶴子『発情装置』・金井淑子『倫理学とフェミニズム』・青木やよひ『フェミニズムとエコロジー』の3著作を読んでもらい、改めて同様の調査を行った。なお、調査対象者はすべて調査者の知人である。フェミニズムのイメージに対する「規範イメージ」ではなく、「本音」を聞き取るためには、調査前から調査者との濃密なラポール形成を必要とすると判断したためである。また本研究ではあくまでもフェミニズムに対するイメージ変容事例の考察に主眼を置くため、インタビューにおける頻出語彙の分析以外での調査対象者に対する統計的な処理は施していない。

3 結果

分析の結果、調査対象者のフェミニズムのイメージには、実際にほとんど著作を読んだことがないと回答したうえで、メディア露出の多い上野千鶴子のイメージ、男並み平等化戦略、男性を考慮しない、攻撃的などの要素が確認された。また、読後のイメージ変容については、上野千鶴子のイメージとその著作とのギャップ（例えば思ったほど好戦的ではなかった）、女性身体や男性、他のマイノリティを考慮するフェミニズムの存在への関心が確認された。

4 結論

以上から、フェミニズムのイメージと実際の著作の間には「距離」があること、その「距離」の原因として実際に手に取られるフェミニズムの著作自体が少ないことがあり、その変容にはフェミニズムの著作を実際に読んでもらうことが一つの契機になり得ることが確認された。今後はこの傾向が量的調査に耐えうるものであるかどうかを確認したい。